

## Phase と Probe-Goal 関係に基づく助動詞選択現象

村 田 和 久

## 1. 導入

本稿は、Yanagi (1999)によって提出された英語の助動詞選択現象の分析を、比較的新しい理論に基づいて分析しなおす試みである。Chomsky (2000)以降、生成文法統語論は Phase ごとに派生が進行すると仮定されている。また、Chomsky (1995)以前のミニマリスト・プログラムで中心的な役割を果たしていた指定部-主要部の照合関係は、Phase 基盤の理論に取って代われ、一致操作は統語対象(Syntactic Objects)の移動を前提としない静的な Probe-Goal 関係によって説明される。Yanagi (1999)はすべての分析を Chomsky (1995)式の理論に基づいているため、現行の理論では概念的基盤を失っている。よって、何らかの新しい分析<sup>1</sup>が必要になるのである。

本稿は、第2節で Yanagi の研究を概観したあと、第3節で Chomsky (2001) 以降の Phase 基盤理論に基づいた提案を示し、助動詞選択現象について分析を行う。

## 2. 先行研究

Yanagi (1999)は、英語の助動詞選択現象を通時的に説明するために、次のような構造を仮定し、特定の認可条件を設定している (PtP = 完了分詞)。

- (1) a. [CP C [TP T [VP HAVE [AGRP AGR [VP Subj PtP Obj]]]]] (Yanagi 1999:446)  
 b. [CP C [TP T [VP BE [AGRP AGR [VP PtP Subj]]]]] (Yanagi 1999:447)
- (2) a. In a language where finite verbs can move overtly, nonfinite verbs can move overtly.  
 b. In a language where finite verbs cannot move overtly, nonfinite verbs as well cannot move overtly.
- (3) The licensing condition on perfect participles:  
 A perfect participle is licensed either  
 a. through the Spec-Head relation with a subject, or  
 b. by adjunction to HAVE.



照合領域では、完了分詞の潜在的照合能力に基づいて照合が行われるため、DPの $\phi$ 素性は照合されるが、格素性は照合されない。非対格動詞は対格の照合をしないためである。DPの格素性は、派生がさらに進んでTとの指定部－主要部関係において照合されることになる。ここで、完了分詞の[+P]素性の照合可能性を考えなければならない。認可条件(3)では、完了分詞の[+P]素性が主語によって照合できるならばHAVEへの付加は不要である(=BE選択になる)と規定されている。非対格動詞の場合、完了分詞と照合関係を確立するのは主語であるから、BEを選択するということになる。このようにして、非対格動詞のBE選択が説明される。

(7) [TP T [VP BE [AGRP Subj<sub>i</sub> PtP<sub>j</sub> [VP t<sub>j</sub> t<sub>i</sub>]]]]  
 $\phi$  照合

古英語に対する分析は、そのまま中英語や初期近代英語にも適用できる。いずれも、定形動詞の顕在的移動が可能であるからであり、顕在的移動が可能であれば非定形動詞も顕在的に移動できるから、AGRP内での照合が可能になるのである。他動詞・非能格動詞の完了分詞は主語とは照合関係を確立せず、非対格動詞は主語と照合関係を確立することはどの時代の英語でも一貫しており、あるいは通言語的にも普遍的であるから、助動詞選択を導出するのは顕在的な動詞移動の有無にかかっているとみてよい。

そうすると、後期近代英語以降の英語で顕在的な動詞移動が見られなくなったことが関心事となる。これによって、非対格動詞の完了分詞が顕在的にAGR主要部に移動できなくなり、主語と照合関係を確立することもできなくなるためである。完了分詞が主語と照合関係を確立できないということになれば、認可条件(3a)を満たすことができなくなるため、必然的に非対格動詞のHAVE選択が導かれることになる。(8)に現代英語の非対格動詞文の例を挙げ、その分析を(9)に挙げる。

(8) John has arrived at the station.

(9) [TP T [VP HAVE [AGRP Subj, AGR [VP PtP t<sub>i</sub>]]]]

以上のように、Yanagiの分析では、非対称的助動詞選択(古英語～初期近代英語に見られたHAVE/BE選択)と対称的助動詞選択(後期近代英語以降に見られるHAVE選択の一貫性)が指定部－主要部の照合関係に基づいて説明される。照合関係を確立するためには完了分詞の顕在的移動が不可欠であり、その有無を普遍的であると思われる(2)の仮定より導いている。また、(2)を分析に組み込むことによって、英語の通時的な助動詞選択の変化(非対称性から対称性への変化)をも説明できる点で有効であると思われる。しかし、第1節に述べたように、彼の分析は指定部－主要部の照合関係に全面的に立脚しており、Chomskyが

この照合関係の破棄を表明しているいま、その分析の妥当性が疑われるのは必至である。

### 3. 新たな提案

#### 3.1. Phase に基づいた理論

Chomsky (2001, 2005)以降の Phase 基盤理論では、少なくとも 2 つの Phase 主要部が定められている。1 つは C、もう 1 つは  $v^*$  である。ただし、 $v^*$  は  $\phi$ -complete な  $v$  であることを示す。 $v/v^*$  は VP シェル構造において語彙的主要部 V の最大当投射 VP を選択する機能範疇であり、広義の非対格動詞は  $v$  を、それ以外の動詞は  $v^*$  を持つとされている。本稿はこの仮定に従う。

- (10) a. [TP T [<sub>VP</sub> v [<sub>VP</sub> arrive John]]]  
b. [TP T [<sub>v\*P</sub> John  $v^*$  [<sub>VP</sub> sing]]]  
c. [TP T [<sub>v\*P</sub> John  $v^*$  [<sub>VP</sub> hit Mary ]]]

Phase 主要部には強弱があり、 $v$  と非定形の C は弱 Phase、 $v^*$  と定形の C は強 Phase の主要部である。Phase 基盤理論に深くかかわるのは強 Phase 主要部であり、統語派生の材料ともいえる Lexical Array は、強 Phase ごとに用意されるとされている(Lexical Subarray)。つまり、統語派生は強 Phase ごとに進行するといえ、1 つの Phase の派生が完了すれば、Phase 主要部の補部領域 (Phase 領域) が C-I インターフェースと SM インターフェースに送られる (転送; 音声化)。転送を受けた領域はそれ以上統語論において操作を受けることがない (Phase 不可侵条件; PIC)。Phase 主要部の投射内にありながら、Phase 領域ではない領域を周縁部 (edge) といい、PIC には従わない。

Phase 基盤理論においては、照合関係も静的である。すなわち、顕在的・陰在的移動を伴わず、探索要素 (probe) と目標 (goal) との、構成素統御にほぼ重なるような統語関係によって実現する。これを Agree といい、格の認可などに重要な役割を果たす。(構造) 格の認可に議論を限定すると、かつては government に基づいて「付与」されていた構造格が、AgrP という照合領域における「照合」に取って代われ、いまや Probe-Goal に基づいた Agree によって「値が付与される」とされている。Probe-Goal 関係は、Phase の概念とともに、統語派生の煩雑さを解消する経済的な理論を構成しているといえる。

#### 3.2. 助動詞選択: Probe-Goal 関係に基づいた分析

前述のとおり、Yanagi (1999) の助動詞選択分析は古い理論体系に基づいているため、新しい理論体系における分析が必要となる。Yanagi は完了分詞と主語 DP の照合関係の可能性を助動詞選択に関係付けているが、本稿は T と  $v^*/v$  との Agree が助動詞選択を決定付ける要因のひとつであると主張する。「要因のひとつ」と書くのは、T と  $v^*/v$  との Agree が唯一の

要因であると考えたと説明が困難になる現象がありうるからであり、多少余白を残す主張となっている。しかし、「要因のひとつ」という表現が本稿の主張を貶めることにはならず、あくまで中心的な要因は上述の Agree 操作であることを強調しておきたい。

助動詞選択が T と v\*/v との Agree によって実現するという仮定は、必要最小限かつもっとも自然なものであると考えられる。助動詞選択を示すような任意の言語において、天候動詞のような、項の限りなく少ない動詞を考える。その動詞（完了分詞）は V に生じた後、v(\*)に移動する。続いて v(\*)P が T と併合し、その時点で Agree 操作が行われるが、完了助動詞として音声化を受けるべき T と、完了分詞の生じている v(\*)以外に、助動詞選択に影響しそうな要素は（理論上の構成物以外は）生じていない。そのため、T と v\*/v との Agree によって実現するという仮定は、必要最小限かつもっとも自然なものであると考える。

(11) [ T [v(\*)P v(\*)-V [vP Ξ]] ]  
└──────────┘ Agree

T と v\*/v が Agree するためには、両者に共通する（適合する）素性がなければならない。そして、うち一方に対してはこの素性が非内在的（解釈不可能）でなければならない。そうすると、もう一方に対しては解釈不可能ではないことになり、Agree を発動する要件である「Probe も Goal も解釈不可能素性を持っていない（活性でなければならない）」を満たさない。そのため、P-G に共通する素性のほかに、何らかの別の解釈不可能素性が「もう一方」にあることが求められる。Yanagi は完了分詞に「照合されるべき」分詞素性[+P]を仮定しているが、本稿は完了分詞が「解釈可能な[+P]をもつ」と仮定する。同時に、T は解釈不可能な[+P]を持ち、Agree の第一成立要件が満たされる。第二要件は完了分詞が何らかの解釈不可能素性を持ち、これが T によって認可されることである。可能性として考えられるのは、完了分詞が解釈不可能な時制素性をもつというものである。以上を図示すると、次のようになると考えられる。

(12) [ T [v(\*)P v(\*)-V [vP Ξ]] ]  
[+uP]            [+P]  
[+Tense]        [+uTense]  
└──────────┘ Agree

この分析は無難なように見えるが、このままでは助動詞選択の非対称性がまったく導出されない。動詞の種類は[+P]素性にも[+Tense]素性にも反映されないからである（T と v\*/v の Agree は、完了構文が生じるということしか保証しない）。それでは、非対格動詞が BE を選択し、他動詞・非能格動詞が HAVE を選択するという傾向の区別はどこに反映されるか。1

つの答えとして、 $v/v^*$ の区別そのものに還元できるといえそうである。例えば、Tと $v^*$ との Agree が成り立てば、完了助動詞は HAVE として音声化し、Tと $v$ との Agree が成り立てば、完了助動詞は BE として音声化するということになる。このように、助動詞選択の傾向は $v$ の  $\phi$ -completeness と密接に相関しているの、ある程度の妥当性は期待できるであろう。

### 3.3. 分析

前節の主張は、Yanagi の挙げている例をすべて説明できなければならない。ただし、挙げられている例は原則として非対格動詞 vs. 他動詞・非能格動詞の対立を示しているのみであって、前節の主張ですでに説明が終わっているようにも思われるが、改めて確認しておく。

まずは古英語の他動詞の例(13)である。説明に必要な要素以外は省略してあるが、議論に影響はない（統語構造は線形順序を問題にしない）。

(13) Ic hæbbe ðe ... gesetne ... (=4)

I have you.Acc.Sg ... set.Acc.Sg

(14) a. [<sub>VP</sub> ic [<sub>V\*</sub>  $v^*$ -gesetne] [<sub>VP</sub> gesetne ðe]]

b. [<sub>TP</sub> ic T [<sub>VP</sub>  $v^*$  [<sub>V\*</sub>  $v^*$ -gesetne] [TRANSFERRED]]]

c. T [<sub>Tense</sub>&[<sub>uP</sub>] >  $v^*$  [<sub>P</sub>]&[<sub>uTense</sub>] (where “>” stands for “c-commands”)

d. Agree establishes between T and  $v^*$ , assuring that the Perfect Construction occurs.

e. T reflects some information on  $v^*$  and Spells-Out as HAVE

(14a)は $v^*$ -Phase までの派生を示したものである。完了分詞 *gesetne* は V 主要部に基底生成した後、 $v^*$ 主要部に付加する。 $v^*$ -Spec には外項である DP *ic* が生起する。(14b)は派生が TP レベルまで進んだものを示している。 $v^*$ は強 Phase 主要部であると仮定しているので、その補部領域はすでに転送を受けている。T は解釈可能な時制素性と解釈不可能な分詞素性を持っており、 $v^*$ は解釈可能な分詞素性（分詞 V が付加しているため）と解釈不可能な時制素性を持っている。また、T は $v^*$ を構成素統御しているの、T を Probe とする Agree が適用される。分詞素性の認可によって完了構文であることを保証し、Goal が $v^*$ であることによって T が HAVE として音声化することが決定する。

次に非対格動詞の例(15)を見る。

(15) ... hio wæs oðfeallenu ... (=6)

... it.Fem.Nom.Sg was decayed.Fem.Nom.Sg

(16) a. [<sub>VP</sub> [<sub>V</sub>  $v$ -oðfeallenu] [<sub>VP</sub> oðfeallenu hio]]

b. [<sub>TP</sub> hio T [<sub>VP</sub> [<sub>V</sub>  $v$ -oðfeallenu] [<sub>VP</sub> oðfeallenu hio]]]

c. T [<sub>Tense</sub>&[<sub>uP</sub>] >  $v$  [<sub>P</sub>]&[<sub>uTense</sub>] (where “>” stands for “c-commands”)

- d. Agree establishes between T and *v*, assuring that the Perfect Construction occurs.
- e. T reflects some information on *v* and Spells-Out as BE

(16a)は *v*-Phase までの派生を示したものである。完了分詞 *odfeallenu* は V 主要部に基底生成した後、*v* 主要部に付加する。*v* 補部には内項である DP *hio* が生起する。(16b)は派生が TP レベルまで進んだものを示している。*v* は弱 Phase 主要部であると仮定しているので、その補部領域は転送を受けずに残っている。T は解釈可能な時制素性と解釈不可能な分詞素性を持っており、*v* は解釈可能な分詞素性（これは分詞 V が付加しているものである）と解釈不可能な時制素性を持っている。また、T は *v* を構成素統御しているため、T を Probe とする Agree が適用される。分詞素性の認可によって完了構文であることを保証し、Goal が *v* であることによって T が BE として音声化することが決定する。

現代英語において対称的な助動詞選択が極めて優勢であることが Yanagi の分析では説明されている。本稿の分析ではどのように分析されるだろうか。本稿では、「T reflects some information on *v*(\*)」という規定によって助動詞選択を導いているので、可能性としては「T が *v*(\*) の情報を反映しなくなった」か「T が反映すべき *v*(\*) の情報がなくなった」かのいずれかが考えられる。ここでは、Yanagi の提案に近い主張をしよう。すなわち、「T が *v*(\*) の情報を反映しなくなった」という主張である。

Yanagi は、「顕在的な定形動詞の移動を許す言語では、非定形動詞の顕在的な移動も許す」かつ「顕在的な定形動詞の移動を許さない言語では、非定形動詞の顕在的な移動も許さない」という仮定を彼の分析のサポートとしている。「顕在的な定形動詞の移動」とはすなわち、「*v*(\*)→T 移動」のことである。移動は、構造上位にある要素が下位にある要素を引き上げるのであるから、「*v*(\*)→T 移動」は T に何らかの牽引力を仮定するのが自然である。そして、現代英語では顕在的な「*v*(\*)→T 移動」が見られないという事実も、T の牽引力が低下した、あるいは消失したとみなすことによって説明できる。

本稿の主張に戻ると、「T が *v*(\*) の情報を反映しなくなった」のは、T の「反映能力」が低下あるいは消失したからではないかと考えられる。その反映能力がいったい何をさすのかは今後の課題としなければならないが、このように考えることは、AgrP といった理論上不要な投射や領域を仮定することもなく、また既存の概念を有効活用しているだけであるので経済的にも望ましい。

#### 4. 結論

Yanagi (1999) の Agr 照合分析に代わり、T と *v*(\*) の Agree による分析を提案した。本稿の分析では、Yanagi の分析が説明できない現象を説明することができる。Yanagi は、助動詞選択を動詞の完了分詞がもつ [+P] 素性の照合に集約しており、照合の可能性は「主語によって照合されるか否か」のみで決定するとしていた。これはとりもなおさず、動詞を完全に二分

化することに等しく、つまりは非対格動詞 vs. 他動詞・非能格動詞の対立に収斂してしまう。このことを表にまとめると以下のようになる。すなわち、Yanagi の主張では、完了分詞の持つ[+P]素性が指定部－主要部関係で認可される場合において完了助動詞は BE が選択され、指定部－主要部関係で認可で認可されない場合は、T に HAVE が付加することによる主要部－主要部関係を通じて認可される。

動詞の種類	主語による[+P]照合	完了助動詞
非対格動詞	可	BE
他動詞・非能格動詞	不可	HAVE

しかし、助動詞選択は非対格動詞であるか否か、という単純な分類に完全に従うわけではなく、両者の中間的なふるまい (HAVE も BE も許す) や正反対のふるまい (BE をとる他動詞や非能格動詞など) も多くの言語において観察されている。Yanagi (1999) は第 5 節でフランス語の助動詞選択を説明しようと試みているが、この言語こそまさに一筋縄ではいかない言語のひとつであり、自身の提案では説明が困難であることを示してしまったといえる。例えば、フランス語の *come* に相当する動詞は BE 選択であるが、*exist* に相当する動詞は HAVE 選択である。しかし、いずれも動詞分類としては「非対格動詞」であり、彼の分析にはそぐわない。

(17) *French*

- a. Elle *est* venue à la gare.  
 she BE come.Fem.Nom.Sg to the station.  
 ‘She came to the station.’

- b. Elle *a* existé dans le passé.  
 it HAVE existed in the past.  
 ‘It existed in the past.’

また、オランダ語やドイツ語などで、非能格動詞に方向・着点指示句がつくと *be* 選択になることも知られている。

(18) *Dutch*

- a. Jan *heeft* gelopen.  
 John HAVE walked

- b. Jan is naar Amsterdam gelopen.  
John BE to Amsterdam walked

(Lieber and Baayen 1997:807–808)

(18b)のような例については、Tが *v/w\** とともに方向・着点 PP とも Agree するという「多重 Agree」を想定すれば説明可能である (cf. Wurmbrand 2011, 村田 2012)。しかし Yanagi の分析では説明が非常に困難であろうと思われる。詳しい分析や説明は稿を改めて論じることになるが、本稿では、Yanagi の分析を新しい理論によって捉えなおし、より広い言語事象を説明する可能性を提示した。

### 注

- 1 先行研究に対する新提案を出すにあたり、先行研究がその大部分を費やしているところの「古英語」の例について、先行研究によって説明ができない例を提示するのが筋ではあるが、扱う現象である (迂言的) 完了形は、古英語期には圧倒的に優勢であったわけではなく、かつ古英語を母語とする話者もいないため、現時点では新たな例文の提示が困難である。なお、本稿提案にとって望ましい例文は、(18)のようなものである。すなわち、「主語+BE+過去分詞+対格支配の前置詞句」(語順は不問; 過去分詞は、本来的には HAVE 選択の、run や walk に相当するような移動様態 *manner of motion* 動詞) のような形式が不可欠なのであるが、その発見は今度の課題である。
- 2 *gesetne* は動詞 *settan* の West-Saxon 方言などにおける過去分詞形 (男性・単数・対格) である (Wright and Wright 1908:259)。
- 3 *Cura Pastoralis* > *King Alfred's West-Saxon Version of Gregory's Pastoral Care* (翻訳された時期は“the end of the ninth century” (Sweet 1871 [1988]:xiii) とされる。)
- 4 この文は、以下の文章に続くものである (本文・訳とも Sweet 1871 [1988]:3 による) :  
& hu ða kyningas ðe ðone onwald hæfdon ðæs folces [on ðam dagum] Gode & his ærendwrecum; ... & hu him ða speow ægðer ge mid wige ge mid wisdom; & eac ða godcundan hadas hu giorne hie wæron ægðer ge ymb lare ge ymb liornunga, ... & hu man utanbordes wisdom & lare hieder on lond sohte, ... (and how the kings who had power over the nation in those days obeyed God and his ministers; ... and how they prospered both with war and with wisdom; and also the sacred orders how zealous they were both in teaching and learning; ... and how foreigners came to this land in search of wisdom and instruction, ...)  
なお、例文(6)中の代名詞 *hio* は、これを主語とする動詞の形態(*wæs*)と動詞過去分詞の形態(*oðfeallenu* [不定形: *oðfeallan*])により女性・単数であることが明白なので、主に *hēo* という形態で代表される 3 人称・単数・女性・主格の人称代名詞であり、上掲の引用中の女性名詞 *lare* (learning; instruction) を指すものとされる(当該代名詞の指示対象に

ついて cf. Toller 1921:127)。

### 参考文献

- Chomsky, Noam. 1995. *Minimalist Program*. Mass.: MIT Press.
- Chomsky, Noam. 2000. Minimalist Inquiries: The Framework. In Roger Martin, David Michaels, and Juan Uriagereka (eds.) *Step by Step: Essays on Minimalist Syntax in Honor of Howard Lasnik*, 89–155. Cambridge, Mass.: MIT Press.
- Chomsky, Noam. 2001. Derivation by Phase. In Michael Kenstowicz (ed.) *Ken Hale: A Life in Language*, 1–52. Cambridge, Mass.: MIT Press.
- Chomsky, Noam. 2005. *On Phases*. Ms., MIT.
- Epstein, Samuel David and Norbert Hornstein. 1999. *Working Minimalism*. Mass.: MIT Press.
- Lieber, Rochelle and Harald Baayen. 1997. A Semantic Principle of Auxiliary Selection in Dutch. *Natural Language and Linguistic Theory* 15: 789–845.
- Mark, de Vos. 2001. *Afrikaans Verb Clusters: A Functional-Head Analysis*. Master's thesis. Norway: Tromsø.
- 村田和久 2012. 「統語的非対格性と語彙的非対格性」『大阪学院大学外国語論集』65: 1–25.
- Sweet, Henry. ed. 1871. *King Alfred's West-Saxon Version of Gregory's Pastoral Care*. EETS OS 45. Oxford: Oxford University Press (Millwood, NY: Kraus, 1988).
- Toller, T. Northcote. 1921. *An Anglo-Saxon Dictionary: Supplement*. Oxford: Clarendon Press.
- Yanagi, Tomohiro. 1999. Verb Movement and the Historical Development of Perfect Constructions in English. *English Linguistics* 16: 436–464.
- Wright, Joseph and Elizabeth Mary Wright. 1908. *Old English Grammar*. London: Oxford University Press.
- Wurmbrand, Susi. 2011. On Agree and Merge. Ms., University of Connecticut.